筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究紀要　第52巻，43－53，2016

学校研究４－①

自立活動の指導に関する専門性向上のための学校の組織づくり

―当校における自立活動の指導に関する現状と課題の整理―

○杉林寛仁　村主光子　城戸宏則　佐々木高一　田丸秋穂　川間健之介

Ⅰ．問題と目的

平成２４年７月２３日に中央教育審議会初等中等教育分科会より，共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）が示された。特別支援学校では，一人一人の教育の充実に向け，的確な実態把握と目的や意図が明確な指導と評価による授業改善を行い，子どもの能力や可能性を育むことが求められている。特に肢体不自由特別支援学校においては，障害の重度・重複，多様化への適切な対応が求められ，外部専門家を活用する取り組みが行われている。さらには，障害のある子どもが地域の小・中学校で学ぶ機会が広がり，特別支援学校が地域のセンター的機能を発揮することが一層求められている。

しかしながら，他障害種と併設する特別支援学校の設置の増加，教員の異動などにより特別支援学校では専門性を担保し，継承していくことが難しい状況を抱えている。

このような状況の中，特別支援教育においては個々の教員の専門性の向上だけでなく，学校組織としての専門性の継承と発展が喫緊の課題となっている。また，その中核は自立活動にあると考えられる。こうした現状を鑑み，当校では平成２３年度より自立活動の指導を円滑にかつ機能的に展開できる仕組みを校内に構築することを目的とする「自立活動プロジェクト」を立ち上げ，３名（現在４名）の教員を中心に取り組んでいる。

本研究は，学校現場における自立活動の指導に関する現状と課題について，関連資料及び当校教員４３名に行った自立活動の指導に関するアンケート調査の結果から，学校現場の抱える自立活動に関する課題を整理し，専門性の継承と発展に向けた当校の学校組織づくりの方向性について検討することを目的とする。

Ⅱ．方法

１．関連資料による特別支援学校（肢体不自由）における自立活動の指導に関する現状と課題の整理

(1)分析対象

・当校主催自立活動実践セミナー参加者アンケート
・公立特別支援学校の自立活動担当者との情報交換記録
・全国肢体不自由研究協議会資料
・特別支援学校教育課程等研究協議会資料
・国立特殊教育総合研究所研究報告書

・関連雑誌（肢体不自由教育）

（２）分析方法

上記の関連資料で挙げられた自立活動の課題に関する文章を抜き出し，それらを筆者ら４名で検討し，カテゴリー分けを行った。

２．当校における自立活動に関わる取り組みの現状と課題の整理

（１）対象

「本校」「施設併設学級」２つのキャンパスのうち，本校に所属する教員(以下，本校の教員)４３名

（２）調査の実施

自立活動の指導に関する質問紙を作成し，留置法により実施した。（配布数４３，回収率１００％）

（３）調査内容

肢体不自由教育の経験年数，所属学部，自立活動に関する理解，自身の自立活動の指導に対する充実感の１１項目。５件法(「そう思う」～「そう思わない」)による評価。自立活動の指導に関する課題について（自由記述）

（４）質問紙の構成

①回答者のプロフィール（２項目）

②自立活動の指導に関わる自己評価について（５項目）

③自身の時間の指導に対する充実感(４項目)

④自立活動の指導について感じていることや困っていること

質問項目については，校内で確認されている自立活動における指導計画のプロセスの項目や教員経験５年以内の教員に行ったインタビュー結果などから，自立活動に関して知見のある教員数名で検討した。

④の自由記述については方法１より得られたカテゴリーで整理した。それぞれのカテゴリー間の関係性を検討し，学校の取り組みの方向性について検討した。

Ⅲ．結果と考察

１．特別支援学校（肢体不自由）における自立活動の指導に関する現状と課題

関連資料より挙げられた自立活動の課題に関する文章をカテゴリー分けした結果，自立活動に関する課題は次の５つに分類された。

(１)個別の指導計画の作成と運用に関すること

(２)関係者間の情報共有と引継ぎに関すること

(３)自立活動の理解と研修に関すること

(４)組織および指導体制等に関すること

（５）役割をもった教員の必要性に関すること

２．当校における自立活動に関わる取り組みの現状

（１）本校の教員の特徴について

①各学部の教員の人数

小学部１５名，中学部１３名，高等部１５名であり，学部による人員配置に大きな差は見られなかった。

②肢体不自由教育経験年数の分布

図１は，本校教員の肢体不自由教育経験年数の分布を示したものである。経験年数は，１年から３６年まであり，全体の経験年数の平均は１１.２１年(ＳＤ１０.００)であった。また経験年数が５年未満の教員が約３０％，１０年以下の教員が，６５％を占めていた。

図２より，小学部は，比較的各年代の教員が正規分布に近い形で所属していることがわかる。中学部においては，経験年数１３年以上の中堅からベテランと言われる年代の教員が極端に少ないこと，高等部においては，突出して１年から３年までの教員が多いことが特徴としてあげられる。

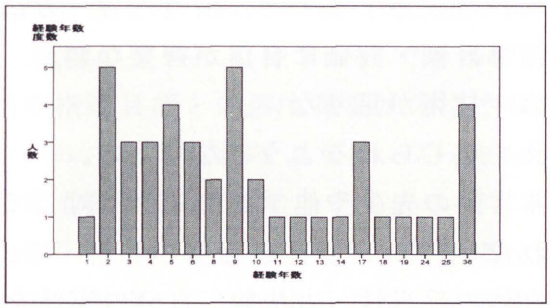

図１　肢体不自由教育経験年数の分布

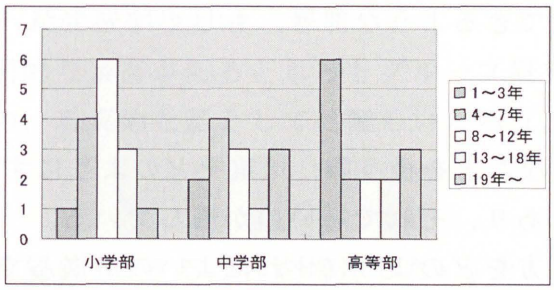

図２　学部ごとの肢体不自由教育経験年数の分布

以上より①経験年数の幅が広くばらつきが大きい，②経験年数の平均は約１１.２年であり，経験年数が１０年未満の教員が３分の２を占めている，③学部間の比較では，所属人数はほぼ変わらないが，経験年数のばらつきにかなり違いがあった。

(2)自由記述で挙げられた項目について

質問④「当校教員が自立活動の指導について感じていることや困っていること(自由記述)」を肢体不自由教育経験年数別に整理すると,以下のような内容があげられた(抜粋)。

①1～3年

- 自立活動の指導についてこれまで経験のある先生のサポートのもとで行ってきた。それがなくなると自分の行う指導が適切かどうか不安や迷いを感じると思う。
- 個別の指導計画の目標がざっくりしており,それだけでは課題がわからない。評価もどのような点で評価できるかわからない。
- 指導によって子どもが数カ月後や数年後に改善している姿を想像できないので,指導に自信をあまりもてない。
- 自立活動に関しての経験が少ないために,それを向上させる場がほしい。
- 担任として,時間の指導の担当者と情報交換があまりできていないように感じる。
- 個々の生徒の自立活動の時間における指導の計画や内容,方法,評価については,専門性の高い先生や担任も含め,複数の教員で行う形が望ましいのではないかと感じる。

②4～7年

- 子どもの状態を見極めて目標設定すること,指導内容・方法を設定することが難しい。
- 実態把握・目標設定・指導計画・評価に自信が持てない。
- 指導方法についての知識・技術が足りない。
- 子どもの変化に手ごたえを感じられるようになりたい。
- (担任という立場で)非常勤の先生や他学部の先生に対して,お願いすること,その評価方法をうまく伝えられない。
- 経験が浅いため,指導自体の妥当性・方法論,自分の実践を振り返る際,他の人の指導を見たり,自分の指導を見てもらったりする機会があるとうれしい。
- 困った時に気軽に相談できるような部署,もしくは先生がいたら心強い。

③8～12年

- 身体的なこと,認知的なことを扱う際,比重をどのようにすればよいのか迷う。担当者によってということもあり,それでいいのか悩んでいる。
- 指導記録と評価の残し方をどのようにすればよいのか悩んでいる。前年度の取り組みも明確に引き継がれていなかったり,次年度についての方法性も同様の状態になっていたり。一定の方法があるとよい。
- 実態把握をチームで行う機会があると子どもの見方や捉え方も多角的に深めていけるのではないかと思う。教科指導の場面のみしか見ていないと困難の要因を捉えることは難しいと思う。
- 個別の指導計画でおさえられるべき自立活動の課題が独立して設定してあったり,不明確であったりしていると思う。
- 個別の指導計画の作成については情報収集のあとの整理が個々の担任に任される場合が多いと感じる。課題整理まで複数で行うか,または整理を援助する人が必要だと考える。

・ 個別の指導計画に基づいていない指導場面があると感じる。
・ 進路や将来の生活に基づく具体的な取り組みを指導目標，指導内容としてたてることはできるが，それに至るまでの過去の時間の指導の経緯（学びの履歴）が十分に把握できない。
・ 指導内容や方法について相談したいと思っても部署があいまいで「詳しい人」に聞くようになっている。担任だけが中心になるのではなく，組織として一緒に取り組んでくれる方がいるとありがたい。
・ 適切に指導できる力量をつける研修時間が，勤務時間内にもっとあるとよい。また外部での研修とあわせてそうした時間を確保していただいて自分も成長してきた。

④１３～１８年

・ 子どもの課題はわかっても，それをどう時間の指導の中でやるかという方法も知識も乏しい。
・ 身体面について相談できる状況は現在はまだあるが，来年度からの体制に不安は残る。
・ 時間の指導の評価は難しいと感じている。評価の観点を絞ったり，評価のスパンなどを工夫したりしている。
・ 個別の指導計画との関係で目標をどう絞るか悩むが，小学部の場合，ある程度担任から目標がおりてくるので，目標の整理はしやすい。できるだけ個別の指導計画の中心課題・基礎課題・他の時間の指導目標と内容も確認するようにしている。
・ 自立活動について全校レベルで考えられるように，ワーキンググループの活動を通して自立活動の勉強の機会なども作れるとよい。
・ 個々について，目標や内容・指導の評価等適宜相談できる人がいると心強いと思う。
・ 自立活動における課題をどう整理し，分担するのか。前年度からの引き継ぎと今年度の課題の明確化，担任・保護者・自立活動担当者のまとめとしての自立活動の方針　以上について調整するシステムがあるとよい。
・ 昔のように研修する時間的な余裕があるともっとグループ研究も行えたろうし，若手も育つだろうと思うものの，現実的な話としては難しいだろう。

⑤１９年以上

・ 自活に対する子どもの希望に「できることを増やしたい」というのがある。ADL（QOL）の向上を目的に子ども自身が実感できる，自活の内容を子ども一人ひとりの実態に合わせて計画し，実践したらよいか，日々考えている。
・ 知覚認知面の指導が必要なケースもいるが，その指導を行うための教材教具が本校には十分そろっていない。
・ 親の要望と子どもの実態認識のズレをどのように修正（調整）して時間の指導内容に組み入れていくか。今年までは専門の先生のリードで行えていたが，個人で上記のようなことを考えると負担が大きいし不安に思う。
・ 自立活動を統括する学校内の組織がきちんとしていないと，各個人の指導の力では全体をとらえて教育指導を一貫して行うことは難しいと感じる。装具・車いす・整形診のことも同様。

肢体不自由教育経験年数が①，②の教員については，自己の自立活動の指導について，実態把握から指導方法，評価まで全体的に不安を抱えていることが多く，指導に関する相談窓口や研修の機会の必要性について多く述べられていた。③④の教員については，自己の指導に関する不安も持ちつつも自分なりの工夫などを模索したり，個別の指導計画とのつながりをふまえた指導を心がけたりするなどの対応があげられた。一方で，自己を含めた学校全体の指導の充実にむけて，課題の引き継ぎなど個別の指導計画に関する課題や研修の機会に対し，どのように学校としてシステムを作るかなどの意見があげられた。⑤についても③④と同様に個々の自立活動の専門性を向上させるために，個々の研修だけでなく，個別の指導計画の運用や役割をもった教員の必要性，人が育つ仕組みの重要性についてあげられた。

以上のことから，特に経験の少ない教員は日々悩みと不安を抱えながら自立活動の指導にあたっている傾向にあり，指導に主体的に取り組みにくい現状と研修や指導に関するサポートの必要性を感じていることがわかった。また，中堅以上の教員を中心に，自立活動の専門性の向上と継承に向けて，研修の機会だけでなく，個別の指導計画の運用や指導体制，役割をもった教員の配置など，組織的な取り組みの必要性を感じていることがわかった。

３．本校における課題の整理と取り組みの検討

自由記述であげられた内容を，方法１で整理したカテゴリーで再度整理した（内容は抜粋）。

（１）個別の指導計画の作成と運用に関すること

・自立活動における課題をどう整理し，分担するのか。前年度からの引き継ぎと今年度の課題の明確化などを調整するシステムがあるとよい。
・ケース会の目的が明確でなく，時間がかかる。

（２）関係者間の情報共有と引継ぎに関すること

・担任として，時間の指導の担当者と情報交換があまりできていないように感じる。
・補装具に関する医療機関との情報共有が難しい。

（３）自立活動の理解と研修に関すること

・実態把握・目標設定・指導計画・評価に自信が持てない。
・自立活動に関しての指導経験が少ないため，それを向上させる場がほしい。

（４）組織および指導体制等に関すること

・自立活動に関する専門的な知識を持った人が継承できる人の配置や採用が必要。

（５）役割をもった教員の必要性に関すること

・自分の行う指導が適切かどうか不安。指導内容や方法について相談したい。
・個別の指導計画の作成が担任に任されている。

整理の結果，本校の課題として挙げられた記述はどのカテゴリーにもそれぞれあてはまり，整理された。当校は，公立学校と比較して交流人事が少なく，同一学校の勤務年数を見ても１年から３６年と幅が広く特殊な環境にあるといえる。しかし，そうした中でも当校教員が感じている課題は，他の公立学校が直面している課題と重なる部分が多くあることがわかった。また，これらの課題については，施設併設学級においても同様な実態があると考えられた。

以上の結果を踏まえ，５つのカテゴリーに分類された課題の関係性を整理（図３）し，当校の現状から取り組みの中心となる柱を以下の４つに整理した。

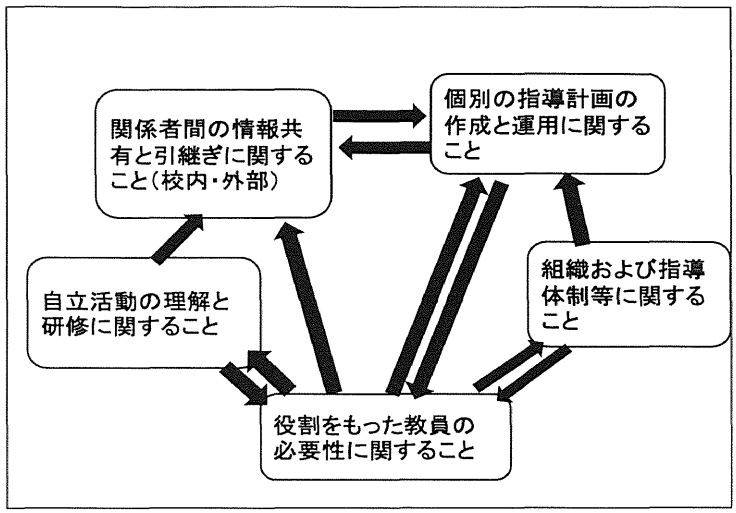

図３　自立活動における課題の整理

①個別の指導計画の活用に関わること
・ 個別の指導計画の目的の明確化と共有
・ 目的を明確にしたケース会の運営・進行

②研究・研修に関わること
・ 研修会の企画
・ 自立活動の時間の指導の中での研修機能（同僚性やメンタリングの要素に注目した研修）

③自立活動担当者の配置に関すること
・ 専門性の整理と継承のための意図的な人の配置

④外部専門家との連携に関すること
・ 補装具作製の手続きの見直しと改善
・ 指導課題についての情報交換

以上４つの柱をベースにし，これらの関係性を常に意識しながら学校組織の自立活動に関する専門性の継承と発展に向けた取り組み行うことが必要と考えられた。

４つの柱に関する具体的な取り組みと成果については，別途報告するものとする。

付記：本取り組みは，平成２３年度に当校独自に組織した「自立活動プロジェクト」を中

心とした学校全体での取り組みの内容を報告するものである。

引用文献・参考文献

1）独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(2010)肢体不自由のある子どもの教育における教員の専門性向上に関する研究，研究成果報告書
2）村田茂(2010),自立活動における教員の専門性．肢体不自由教育197,2-9
3）筑波大学附属桐が丘特別支援学校編(2008)肢体不自由教育の理念と実践,ジアース教育新社
4）中央教育審議会(2011)特別支援学校教育課程等研究協議会資料
5）全国肢体不自由研究協議会資料(2010)

平成22年11月10日

自立活動の指導に関するアンケートのお願い

自立活動ＷＧ

◆アンケートの主旨

次年度より、学校体制として新たに自立活動の指導に関する体制の検討をしていきます。今後、体制の構築に向けて様々な観点からの情報収集を行います。その一環として本校の自立活動について先生方が感じていることをアンケートし、桐が丘本校の自立活動に関する実態の整理を行いたいと考えています。お忙しいところと思いますが、みなさまご協力お願いします。

◆アンケートの答え方

・アンケートは、みなさん時間の指導の担当者の立場でお答えください。

・アンケートは、１から３までお答えください。

アンケート１で、時間の指導の経験に「無」と○をした方は、アンケート３にお進みください。

アンケート２については、項目ごとに、そう思わない「１」から、そう思う「５」までの５段階で当てはまると思われる数字に○を付けてください。

アンケート３は、参考までにいくつかのキーワード例を載せてありますが、自由記述でお書きください。

アンケートの回答は、今週中に回収袋へお出しください。

自立活動の指導に関するアンケート

1　あなたのプロフィール

・所属学部　　：　１小・　２中・　３高

・肢体不自由教育の経験年数：＿＿＿＿＿＿＿年（平成 22 年 3 月末日　時点）

・時間の指導の経験の有無　：　１有・　２無

（＊２無に〇をした場合は、アンケート３にお進み下さい。）

2　自立活動の時間の指導について

①個別の指導計画に基づいて自立活動の時間の指導目標が設定されていますか

そう思わない　1　2　3　4　5　そう思う

②客観的にみた、自身の時間の指導について

そう思わない　そう思う

・実態把握ができる　1　2　3　4　5

・目標設定ができる　1　2　3　4　5

・目標に応じた指導内容を選定できる　1　2　3　4　5

・目標に応じた指導方法を選定できる　1　2　3　4　5

・指導に対する子どもの評価ができる　1　2　3　4　5

③自身の時間の指導に対する実感・手ごたえ

そう思わない　そう思う

・子どもの変化に気づいて適切に評価できる　1　2　3　4　5

・目標に対する指導の結果に手ごたえを感じる　1　2　3　4　5

・一人で時間の指導ができる　1　2　3　4　5

・時間の指導については、指導的立場の教員の援助が必要と感じる　1　2　3　4　5

・時間の指導で、困っているケースがある　1　2　3　4　5

・時間の指導に自信を持ってできるようにしたい　1　2　3　4　5

３　自立活動の指導について感じていることや困っていることを自由にお書きください
（例：アンケート１・２を振り返って、指導計画、指導方法、評価、研修、自立活動について相談できる人がいるか・・・など）

ありがとうございました。